

# 図書館友の会 ニュース

2025年  
4月号

No. 34

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 杉原 富人》

## 図書館友の会「岸和田再発見教室」の催し

◇公開講演会 共催：八木地区市民協議会・岸和田市立図書館

### 弥生時代から古墳時代へ

—鉄器・青銅器からみた畿内における政治権力形成—

講師：禰宜田 佳男氏（大阪府立弥生文化博物館館長）



20世紀、大和政権は大和の弥生社会が順調に成長し、それが母体となり成立したことが定説でした。しかし、発掘調査資料が蓄積されても大和の弥生社会で鉄器が潤沢に出土することもなく、首長墓も未発達で、21世紀を前後する頃から大和弥生社会の優位性を疑問視する考え方が示されるようになりました。講演では、こうした研究史を振り返り、大和における鉄器・青銅器の意味を再検討し、大和の弥生社会について私見を述べてみます。

日時：6月14日(土)午後1時30分～4時 《参加費無料》

場所：岸和田市立八木市民センター(池尻町) 講座室1 (2階)

定員 60名(申込み先着順) 6月4日(水)10時より図書館(本館)で受け付けます。

直接または電話(072-422-2142)でお申し込みください。

駐車スペースが少ないため、自動車でのご来場をご遠慮ください。

歴史カフェ：日本人の起源—古代DNA解析の結果から—

「日本人はどこから来たのか？」古代DNAの解析結果を基にした知見を紹介し、出席者の皆さんと意見交換します。

5月11日(日)午前10時～正午 八木市民センター2階講座室1

カタリスト 杉原 富人さん(岸和田市図書館友の会会長)

定員 40名 4月11日(金)10時から図書館本館で受け付けます。

参考図書 『人類の起源』(篠田健一著, 中公新書, 2022年2月発行)

『日本人の源流』(斎藤成也著, 河出文庫, 2023年3月発行)

## 詩の教室 公開講座

## 声に出して読んでみよう

～ここに残る詩や歌について一緒に語り合いませんか～

日時 5月18日（日）午後1時30分～4時

場所 図書館本館3階視聴覚室 【参加費 無料】

定員 30名（申込み先着順）

あなたの好きな詩や歌の歌詞（歌謡曲、童謡など）、あなたの書いた詩を声に出して読んでみませんか。その時に感じた気持ちやなつかしい思い出など、日々の情感を豊かにしてくれる詩、言葉の魅力についていっしょに語り合いませんか。

「詩の教室」講師の倉橋先生からは、詩の楽しみ方、独自の言葉を見出すことの大切さ、詩の表現の手法などを解説し、創作した詩にはていねいに助言していただけます。

※参加希望の方は、「読みたい詩」の原稿（配布用）を講座前日（必着）、図書館本館迄ご持参（または郵送）してください。

## 短歌教室公開講座

## 戦後短歌の巨人「塚本邦雄」を探る

短歌教室の公開講座は3月2日に25名の参加で開催。参加者の感想を紹介します。

### ○ 塚本邦雄の世界に少し触れさせてもらった

3月2日の公開講座は、短歌の巨人と言われている「塚本邦雄」について、江畑實氏（大阪短歌クラブ会長）と金川宏氏（岸和田短歌教室講師）が語っていただきました。

両氏は、塚本邦雄の各歌集から2首ずつ選んで解説して下さり、塚本邦雄の世界に少し触れさせてくださいました。

私は長く短歌を学んでいますのに塚本邦雄の名前も知らずにいましたが、戦後の前衛短歌を牽引されたすごい歌人であったことを知りました。

前衛というのは、絵画の抽象画のような意味だと江畑先生の説明がありました。塚本邦雄の短歌は、単なる具象を写生するだけに終わらず、幅広い知識により虚の世界にまで転換していく中味を2人の先生に読み解いていただきました。まるで初めての高級料理を試食させていただいた気分、食レポも充分できないですが、身体に滋養をいただいた心地がしました。両先生ありがとうございました。  
(藤田 和美)

### ○ 予定時間を過ぎても「まだ聞きたい…」

『創世神話「塚本邦雄」初期歌集の精神風景』というこの本に基づく講座は、一体どんなに難解な話だろうと（苦しみながら読み終えた者として）構えて臨みました。講座は、著者江畑實氏と短歌教室講師の金川宏氏との対話形式で始まりました。

初めにお二人の代表的な歌2首ずつをあげて解説。2首は共通して日常的なある事象から世界が消滅していくという若者の終末観を読んだもの…この「終末観」は、塚本邦雄が終生追求し続けた歌のテーマであったと気づく。

次に江畑氏より、短歌は日常の私的な事象から詠まれることが多いが、そのような「私性」を消して非現実、虚構を詠むことが大事。その中に本質的な世界がある。現在は単に「私性」を歌う時代ではないと提言。それは、塚本短歌に学びあとに続けということと受け取ったが、今ひとつ納得できなかった。

講座は、塚本邦雄の初期の7つの歌集からお二人が2首ずつ選んだ作品の鑑賞、解説と進む。昭和30年～40年代の『水葬物語』『装飾樂句(カデンツア)』『日本人靈歌』

『水銀傳説』『綠色研究』『感幻樂(カンゲンガク)』『星餐図(セイサンズ)』と続く代表作である。お二人の話から言葉の深さに頷いたり、感覚的には響くが理解不能と傾げたり。語られる塚本の経歴から少しずつ掴めてくる。最も影響を受けた盟友・杉原一司の夭逝。それに続き自らも結核に侵され闘病。死と隣り合わせの中での歌作り。そして何よりも恐るべき戦争体験。戦争への憎しみ。一方、戦後復興したと言われる社会への批判。そして礼拝を続けたキリスト教への思い(旧約聖書まで熟読しつつ非信徒である)。これら全てからの終末観。全てへの冷徹な監視眼が歌の底流にあると知った。

また歌の根幹には、あらゆる分野へのおびただしい知識欲とその造詣の深さを感じさせる。歌に織り込まれた表現には読み手の予備知識が不可欠である。技巧的には句割れ、句跨り、初七調などを導き出し、超絶技巧ともいえる韻律の工夫作が多々ある。言語芸術の極みまで達したと思われる。

塚本は、その斬新性革新性から前衛と言われつつ様々な批判を受けながらも、自己の追求する短歌に邁進し、現代短歌の発展に貢献したのだ。

お二人の話により、たどたどしくも塚本短歌に一步近づけた。その大きな動きは自分の短歌づくり(やはり「私性」は捨てられないという気持ち)の中にも秘かに流れるのだろうかと思いつつ歌づくりに励んでいきたい。

最後に、江畑氏が伝えたいこととして、塚本について多くの著作を読むよりも、この7つの歌集を虚心に読む。そこから得たものをもとに歌を詠んでほしい。塚本短歌を学ぶことで現代短歌のレベルは上がると語られた。

予定時間を過ぎててもまだまだ聴きたいという雰囲気の中で終わった。窓の外の曇りが晴れ清々しさが伝わってきた。参加者は予定より少なかったが、中身の濃い学習となった。

お二人の先生方、ありがとうございました。

(尾崎けい子)

## 文章教室公開講座「何でも書こう！」 2024年11月16日開催

昨年11月16日に文章教室の公開講座を行いました。当日は、6名の新しい方が参加して下さいました。当日、教室には、講師の倉橋先生の著書と、教室生が過去に発刊した書籍を展示しました。教室生は、「エッセイ」、「創作」どちらかの分類で800字程度の作品を持ち寄り、合評をしました。普段よりも短い文章でテンポよく、意見も活発に交わされ、活気ある教室となりました。倉橋先生からは、それぞれの作品を認めた上で、「こういう書き方がいい」、「まとめたらかん、もっと具体的に詳しく書かないと」、「何かが起こった時というのは、その時は大変なんだから、後から淡々と書いてはその大変さは伝わらない。もっとありのままに書いたらいい」などと、鋭いアドバイスをいただきました。

参加者からは、内容や雰囲気がよかったとの意見が多く、楽しんでいました。

## 2025年度 岸和田市図書館友の会総会

日時 6月12日(木)午後1時30分～

場所 岸和田市立図書館(本館)3階自習室

内容 ①2024年度事業報告及び会計報告

②2025年度事業計画(案)及び会計予算(案)

※総会終了後、各教室生による催しを予定しています。会員の方はこぞってご参加ください。

### 地名の秘密

### ③2近義の里(こぎのさと)

#### 古代にこの一帯を近義郷と称したことによる

貝塚市内を走る単線で5・5キロ、全国で3番目に短い鉄道で貝塚市海塚に本社のある水間鉄道(通称水鉄)貝塚駅と水間観音駅を結んでいる。また、貝塚駅で南海本線と接続している。この水間鉄道の貝塚駅から2番目の駅に近義の里駅がある。『日本歴史地名体系』平凡社出版の地名辞典に「近義郷」の解説があり、平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄』に「こぎ」・近木・小木・古木とも書かれている。駅の北西の畠中あたりに近義の中心があり、近義氏の本拠があったと推定されている。江戸時代に書かれた『和泉史』にも、この周辺を郷域とするとある。『大日本地名辞書』は熊取村の諸邑をも加えている。このあたりに居住していた聶木(むこぎ)氏のなまったものであるとする説や、このあたりに繁茂していた五茹(むこぎ)の脱落であるとする説がある。

また近義とは古韓語で王の称号を「干(かん)」とも「早岐(かんき)」とも言った。それがなまって「こんき」となり、ンが脱落してコキ、ついで「近義」の当て字を使うようになった。そして「こぎ」に転訛したと考えられるという説がある。

また『日本書紀』に韓国王をコシキと訓む例があり、ここからコギになまったと言われている。『姓氏録』に「近義首(こぎのおびと)は新羅国王主である角折王(つのおりおう)の後裔である」と記されているので、近義氏は新羅系渡来氏族と考えられる。郷内を近木川が貫通している。

余談になるが、我がご先祖の浦田家は、菅原氏の末流であり、五田姓の一つを名乗り、近義の庄の豪族として勢力をふるったが、徳川初期没落して岸和田沼村に転住し、ぬしや平兵衛の屋号を用い、岸和田藩御用鍛冶を命ぜられるとともに、年寄職を勤める。ご先祖はぬしや平兵衛の分家で歴世治右衛門を名乗り、五軒屋町に居住し、鍛冶業を営み、のち本家に代わって、岸和田藩御用を継承して幕末に至ると伝わる。私で14代目である。

参考図書 『大阪難読地名がわかる本』創元社編集部 発行者矢野敬一

『大阪府行政百年史泉南版』新風土器出版(株) 発行者行政人事調査会

文責 文章教室浦田榮二

